その他の技術サービス業

技能士養成学校を活用して炉の匠を育成

7-35 株式会社ヤマサキ

築炉（ちくろ）を生業とする会社

福岡県大牟田市に本社を置く株式会社ヤマサキは、築炉及びプラント配管工事を主な業務内容とする企業である。築炉とは、耐火れんが等による工業炉（高炉、コークス炉、熱風炉等）の新設、改修、メンテンス作業をいう。日本の基幹産業である鉄鋼及び非鉄金属各社においては、工業炉は金属を溶解するなどの際に重要な設備であるが、この施工は機械で行うことが難しく、築炉技能を持った技能士の「技」が必要である。同社は537名全社員のうち、約200名の築炉技能士を抱えており、日本全国は勿論のこと、海外工事にも技能士を派遣している。

技能士の人格から育てていくヤマサキの訓練校

「コークス炉（石炭を蒸し焼きにして作られるコークスを生成する炉）の寿命は30数年と長いんですが、各製鉄所が更新時期にさしかかっており、技能士がその改修工事で活躍しているんですよ。」とインタビューに応えてくれたのは教務課長の古賀氏。教務課という名称は企業としてはなかなか目にしない部署だが、ヤマサキは「企業は人なり」という理念に基づき、新入技能社員を育成するため、昭和46年、福岡県知事の認定を受けて「山﨑高等技術専門校」を開校している。つまり、教務課は築炉の世界に飛び込んできた人材を指導する部署である。

「専門校の基本方針は、知識・技能の習得よりも人間性、人格形成の場でもあります。大牟田本校は全寮制で、週2～3回指導員が入校生と一緒に合宿し、寝食を共にしながら知識・技能だけでなく、生活面まで教育しています。」と専門校のビジョンを古賀氏は説明する。

ただ技能を磨くことだけを促すのではなく、それを習得する人材を磨く。人の成長を重視する同社の姿勢を感じる言葉ではないだろうか。ヤマサキに入社した新入技能社員は、全員専門校に入校する。訓練期間は1年で、本校が大牟田、同社の営業所六ヶ所が分校で、約5ヵ月間は本校で集合訓練があり、約7ヵ月間が分校での分散訓練（OJT）である。本校では基本的に午前中が学科で、午後は実技訓練に当てられている。そうして1年間の訓練を終えると修了（卒業）して、分散訓練で馴染んだ職場へと巣立っていく。

「一般の人より早くチャレンジでき、更に学科免除という特典があります。専門校で習得した知識やOJTで身に付けた技能を発揮してもらう到達点の1つが2級築炉技能検定の合格というわけで修了生全員がこれを目指すことになります。その後、2年の実務経験を経て1級の検定に挑戦します。そのために勉強会も定期的に開催しています。」と修了後の進路を詳しく説明する古賀氏。専門校に入校して1、2級の技能検定に合格することが、取りも直さず同社の技術的な土台を築くことになり、技能士自身にとっては、社会的地位の向上になると同時に同社の中で「要」としての戦力であることは間違いないようだ。

炉の匠から業界の匠へ

古賀氏を始めとしたベテラン技能士の厳しくも優しい指導を受けて検定に合格した技能士はヤマサキにとって最も大切な原動力であると古賀氏は語る。また、検定は、彼らの技能を評価し、社会的地位の向上にもなり、技能に見合った給与を支払うための手段として同社で活用されている。技能士の存在が同社の技術力や信頼の高さとして顧客に認識されている経営上のメリットも大きい。

「【築炉】という職種はそれほど知名度の高い仕事ではありません。だからこそ、築炉の技能検定に合格した彼らが全国及び海外で活躍して、築炉という技能を持った技能士がいること、彼らがいなくては日本の基幹産業が動かないことを知ってもらいたいと思っています。」と技能士の重要性を古賀氏は力説する。技能士の今後について古賀氏はどのように考えているのだろうか。「これまで主に技能士の人材育成に携わってきましたが、今後は築炉技術のプロフェッショナルであると同時に人格形成、職業人としての誇りと自覚を持つて社会に貢献する、真の人材になって欲しいですね。」

教務課長の古賀氏

株式会社 ヤマサキ

- 業種：その他技術サービス業
- 住所：福岡県大牟田市
- 代表者：山崎 一正
- 創業：明治8年
- 従業員：608名
- 技能士：延べ316名

技能士へのインタビュー

齊藤　健太氏　（24 歳）　1級築炉技能士

複雑で高度な技術を手に入れるために

インタビューに応えてくれた齊藤技能士はヤマサキの山﨑高等技術専門校築炉科を修了して同社の大牟田事業部に配属されて 5 年目、主にアルミニュウムの溶解炉、焼却炉の耐熱タイルの内張りなどの業務に携わっている。齊藤氏は高校卒業後ヤマサキに入社。「はじめは築炉といわれても何のことか分かりませんでした。単純に特殊な仕事というイメージはありました。」

手に職を持ちたいと考えていたが、どうせ手に職を持つのであればできるだけ複雑で高度な方がよいと思っていたという。「いろんな所でいろんなことに対応できるようになりたいと思っていました。自分が選んだ分野の中でのオンリーワンになりたいという考えでヤマサキに入社しました。」と斎藤氏は当時を振り返る。

達成感と会社内外の仲間の存在が励みに

「今の仕事は楽しいですね。築炉の仕事はやりがいがあります。いくらしんどい現場でも作業が終わったときの達成感が大きいんですね。自分の持っている技能をさらに高めていこうと思うモチベーションが沸くのもその達成感があるからだと思います。」と築炉の仕事の魅力について齊藤氏は語る。もともと負けず嫌いな性格もあり、自分の技術を磨くことに前向きな齊藤氏だが、炉という重要な仕事だからこその醍醐味もあると言う。

「炉というのは各工場の設備と密接に関連しています。当然、操業関係に携わっている会社、同社の協力会社と一緒に仕事をしていかなければなりません。そういった立場や持っている技能が異なる人たちと一緒に仕事をすることも楽しいですし、自分の意識が高まっていくのを実感しますね。」

原理原則の理解と、その組み合わせの重要さ

齊藤技能士は昨年度 1 級築炉技能検定に合格した。「2 級の検定に合格したときは、検定を自分の技能がどれだけのものか、という目標として捉えていきました。けれども、1 級の技能検定に挑戦したときには、自分の技量をもっと高めるための目標にもなりました。」

そのような目標をたてて挑戦した検定に合格した利点としてはどのようなことがあるのだろうか。「技能検定合格に必要な知識やスキルには、経験したことのないものもあります。けれども実務と関係の無い事を勉強することで、技能の幅が広がったのも事実です。また、検定に合格することは、自分にとってだけではなく、顧客から信頼されるという側面があるのではないでしょうか。例えば、高炉（鉄鉱石から銑鉄を作り出すための炉）やコークス炉（石炭からコークスを作り出すための炉）などの複雑な施工などに関して顧客から質問を受けた時、より上級の検定に合格していると適切な回答ができるようになります。これは検定を受検するまでに勉強した『原理原則』が分かっているからできることだと思います。」

原理原則が分かっているからこそ、それらを組み合わせて臨機応変な対応ができる、検定が技能を公証するためのみならず、より高い技能を修得するための足掛かりになっているようだ。

仕事からどれだけ学んで次の仕事を楽しむか

「自分が持っている技能をさらに磨いて行きたいですね。そのために、どんどん自分より上の技能を持つ人の技を盗んでいきたいとも思っています。」と語る齋藤氏。来年からプラント配管を勉強するために、再度ヤマサキの技術専門校プラント配管科に入校する予定だという。そんな齋藤氏に、今後ものづくりに入る若者へのメッセージを伺った。「入社して与えられた仕事は、嫌なことがあったとしても続けることが重要だと思います。」

「どんなにきつくても、その中で自分のやりがいを見つけて欲しいですね。どの会社のどの業務についたとしても、きついことはあります。重要なのはそこからどれだけ学んで、次の仕事を楽しめることではないでしょうか。」

築炉課実技訓練風景